

DiVE.tv



BiPH

への訪問ケアの導入を、  
インテイクシートの開発



主催  
社)Bridges in Public Health(BiPH)  
国際リハビリテーション研究会



真如苑・名古屋NGOセンター  
協働事業

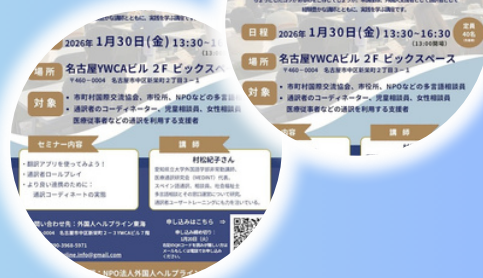
# 東海地域NGO 活動助成金 報告書

2025年度

外国人ヘルプ  
ライン東海

相談支援者のための  
通訳活用講座②

～外国人相談者とのコミュニケーションを円滑にするために～



RASA-  
Japan



幸縁





## CONTENTS

|                                                  |    |
|--------------------------------------------------|----|
| 主催団体からのメッセージ .....                               | 3  |
| 宗教法人 真如苑<br>特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター                 |    |
| 助成団体報告書                                          |    |
| 1. NPO法人 外国人ヘルプライン東海 .....                       | 4  |
| コミュニティ通訳・利用講座：より良い協働を目指して<br>助成金額 200,000円       |    |
| 2. NPO法人 幸縁 .....                                | 6  |
| グアテマラ小中学生の国語力を高めるための読書推進活動<br>助成金額 200,000円      |    |
| 3. 一般社団法人 Bridges in Public Health .....         | 8  |
| 在日外国人への訪問ケアの導入を円滑にするインテイクシートの開発<br>助成金額 198,180円 |    |
| 4. 一般社団法人 DiVE.tv .....                          | 10 |
| It's Me Camp 2025<br>助成金額 200,000円               |    |
| 5. 特定非営利活動法人 RASA-Japan .....                    | 12 |
| 食品配布支援<br>助成金額 200,000円                          |    |
| 公募要項 .....                                       | 14 |





## 主催団体からのメッセージ

「東海地域NGO活動助成金」は、東海地域を拠点に活動するNGO団体の活動を支援し、その発展に寄与することを目的に、宗教法人真如苑と名古屋NGOセンターの協同事業として2009年度より始めました。ここに第17回目である2025年度の助成事業の報告書をお届けいたします。

当年度は5団体からの応募をいただきました。外部有識者を含めた選考委員会による厳選な審査の結果、応募いただいたすべての団体が助成を受けました。

真如苑の関係者の皆様のご協力に、改めてこの場でお礼を申し上げます。今後とも東海地域の中小規模NGOの成長にお力添えをいただきながら、新しい価値観や社会の在り方を求めて活動し、連携できることを願っています。

なお現在、2026年度（第18回）の助成事業が公募によって決定しております。

しんにょえん

### 真如苑について

しんじょう

真如苑は開祖・伊藤真乗（1906～1989）が昭和11（1936）年に開いた仏教教団です。開祖は真言宗醍醐派総本山醍醐寺で得度し、伝統仏教の法流を悉く受け継ぎました。その後、仏典を研鑽の末、仏遺言の教え・大般涅槃經を中心とする真如苑を設立。現在は、伊藤真聰が真如苑の苑主として教団を代表しています。真如苑は、大般涅槃經に説かれる大乘利他の精神を、日々の社会生活に活かす実践を重んじます。真如苑の社会貢献活動は、開祖が願って止まなかった人類の至福と世界平和を現代にあらわしていく営みのひとつです。

## コミュニティ通訳・利用講座 より良い協働を目指して

コミュニティ通訳とは日本語を母語としない人々が必要な行政サービスを受けることができるよう、言葉を使ってコミュニケーションの橋渡しをする人たちのことであり、主に自治体や国際交流協会、NPOなどで活動している。本事業は、通訳者を利用する人たち、行政職員や相談業務従事者を対象として、研修を行うものである。



### 事業の背景と目的

地域で暮らす外国人住民の増加に伴い、通訳を配置したり、NPOや翻訳会社に委託したり、オンライン通訳を実施したりしている行政機関が増加している。しかしいまだに移民政策が存在せず、通訳者の利用に慣れていない日本の行政機関では、通訳者が勝手に外国人と話してしまったり、本来やるべきでない役割、本人との連絡調整や他機関への同行を頼まれてしまったりするなど、通訳者の協働について課題が山積している。通訳者がその能力を最大限に発揮し、円滑にコミュニケーションを行えるようにするためには、通訳者側のスキルアップはもちろんのこと、利用する側にも心構えや利用のコツなどを学んでもらう必要がある。

本事業は、コミュニティ通訳者として豊富な実践をもち、通訳者向けの研修を行っている人を講師としてお招きし、2回にわたって研修を行うものである。研修の主たる目的は、上述したようなコミュニティ通訳を利用する行政機関、相談従事者、医療機関などにその利用のコツやスキルを身に付けてもらうことだが、コミュニティ通訳そのものについて理解を深めることもねらいとした。

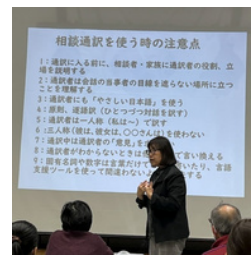


### 事業の内容

「相談支援者のための通訳活用講座：～外国人相談者とのコミュニケーションを円滑にするために～」

#### <第1回>

- 日時：2025年11月14日 13:00-17:00
- 場所：あいち国際プラザ2階 アイリスルーム \*愛知県国際交流協会との共催
- 講師：村松紀子氏（前兵庫県国際交流協会職員、医療通訳研究会(MEDINT)代表）
- 参加者数：33名
- 内容：コミュニティ通訳とくに相談通訳の役割について学ぶとともに、通訳を使い慣れていない支援者が陥りがちな誤りや、通訳を使う時の注意点について、現場を熟知している講師から実践にもとづいた知識を学んだ。通訳アプリと通訳者の使い分けについて、実際にボイストラなど翻訳アプリを利用したワークショップを行うとともに、病院の通訳場面を設定したロールプレイを行い、参加者が医師役、患者役、患者の家族役、通訳役をそれぞれ演じることで、通訳の難しさを実際に体験してもらった。



#### <第2回>

- 日時：2026年1月30日 13:00-17:00
- 場所：名古屋YWCA 2Fビックスペース 当団体の単独開催
- 講師：村松紀子氏
- 参加者数：17名
- 内容：第2回目は、フォーラムシアター（ブラジルの演劇実践家アウグスト・ボアールが生み出した「被抑圧者の演劇」の手法）を使い、通訳者の役割や、通訳者との協働のポイントについて実践的に学んでもらうことを重視した。まず、講師が作成したシナリオに従って、当団体の通訳者が「問題のある通訳者」が登場する即興劇を演じた。具体的には①ハローワークにて通訳者が通訳をしないで自分で話をしてしまう、②学校の進路指導で、先生がこどもに通訳をさせる、といった二つの場面を取り上げた。これらの即興劇を参加者に観てもらい、劇中の通訳者の問題や改善方法について話し合った。

## No.1

### NPO法人 外国人ヘルプライン東海

外国人住民の困りごとを解決するため、相談事業、通訳派遣事業を実施し、多文化共生社会を目指す。

〒460-0004 名古屋市中区新栄町2-3YWCAビル7階

TEL : 090-3968-5971

e-mail : fhelpline.info@gmail.com

URL : <https://fhelplineinfo.wixsite.com/website-1>



## 活動の成果と課題

本研修には、市役所や国際交流協会、社会福祉協議会、障害者相談支援センター、スクールソーシャルワーカー、保健センターなど様々な機関の支援者が参加した。アンケート結果をみると、研修内容については多くの参加者から高い評価を得ており、参加者は、通訳者の利用のコツを身につけ、コミュニティ通訳について理解を深めることができたと考えられる。今後、本研修参加者が依頼する通訳者については、通訳以外の業務を求められることが減少し、通訳者の負担やストレスの軽減さらには支援者と通訳者のより良い協働につながることを期待される。

一方で、数十人程度の参加者を対象とする研修では、その効果はきわめて限定的である。当団体が目標とする「外国人住民が支援機関につながり、適切な行政サービスを利用できるようになる」までには、こうした研修を継続的に実施し、さらに対象者を広げていく必要がある。

またアンケートでは、翻訳アプリについてもっと知りたいという声が寄せられた。今回は翻訳アプリを実際につかい、通訳者、アプリのそれぞれの特性について概要を紹介してもらうにとどまったが、今後はさらに深く学んでもらう必要があると考えられる。



即興劇



翻訳アプリを使って

### 実施事業での現地もしくは参加者の声

- ・ 今日のような「コミュニティ通訳実践」はあまり見受けないかもしれません。
- ・ 通訳の仕事の大変さをより深く理解出来たと思う。通訳をコーディネートする際短い言葉で伝えてもらえるようにしたいと思います。
- ・ 当事業所、市職員、みんな受けた方が良くと思いました。
- ・ 村松先生の「通訳者をムダ遣いしない」という言葉が非常に印象的でした。また、通訳が合理的配慮であるということも支援者側は常に意識しなければならない事だと感じました。

### 事業実施団体のひとこと

この助成金でいつも新しいことに挑戦させて頂いています。今回の実施で得られた知見や経験をもとに、今後もブラッシュアップしていきたいです！

# グアテマラ小中学生の国語力を高めるための 読書推進活動

NPO法人幸縁（以下、本法人）は、グアテマラ共和国ソロラ県サンティアゴ・アティトラン市内（以下、活動地）にて共に教育活動をしている小中学生（計45人）を対象に、現地の学習言語であるスペイン語の語彙力向上のため、小学生30人には週4日の学習塾クラス内で黙読タイムおよび読書感想文活動を実施し、中学生15人には読書活動のため定期的に集まる場を設け、まずは読書の習慣付けを主眼とした活動を実施した。



## 事業の背景と目的

本法人の副代表（在日グアテマラ人）が2024年夏に初めて活動地に来訪し（副代表の出身は別地域）、現地の小中学生と直で対面した。その際、子ども達の話すスペイン語が、首都圏在住者や副代表の出身地住民と比べて年齢のわりにごくシンプルなフレーズのみを使って話していることに気付いた。これは活動地の日常会話は現地語（マヤ語の一種）が主である（グアテマラは現地語が今も日常に根付いている地域とすでに廃れてしまった地域が混在しており、副代表の出身地は後者）ことに加え、活動地内に本屋や図書館が身近になく（更に一冊3000円程度なので高級品の部類になる）、日常生活の中で本に触れる機会が乏しいことも原因であろうと思われる。このままでは、せっかく勉学を通して自身のキャリアを切り開こうとしている活動地の子ども達が、将来いざ高等教育機関で学ぼうとしたり、新規ビジネスを始めようとしたときに、彼らのスペイン語力が学業やビジネスの弊害にならないかという懸念が生じた。そこで、スペイン語の語彙力、読解力、思考力、伝達力向上のための読書推進活動を実施することにした。



## 事業の内容

活動受益者は、本法人が運営する現地学習塾に通学する小学生3～6年生（30人）と、本法人が運営する奨学金事業にて助成対象になっている中学生1～3年生（15人）である。

小学生は週4日各日2時間通塾し、そのうちの1クラスに黙読タイムと、読了後に読書感想を作文する時間を設けた。また塾の時間外にも読書ができるよう、本の貸出システムも導入した。活動期間中は3ブロック（10週間/ブロック）塾を開講し、本助成にて新規購入した本や現地スタッフの伝手で私立校から借用した本を活用した。なかには塾内にある本を全て読了した子どももいた。



中学生には活動期間前に本活動の主旨説明をし、まずはスペイン語の語彙力テストを実施した。しかし、テスト結果が副代表および現地責任者（現地人の教職経験者を雇用）の想定以下であり（全員ほぼ満点を想定していたが、実際は8割程度の出来だった）、課題図書の見直しを行うこととなった。活動期間内の1冊目は25年夏にディズニー映画にもなったイギリス児童文学（対象年齢12～13歳）を読んだ。約300ページを全6回に分けて読み、別紙のレジュメ（副代表と現地責任者の共同制作）に沿った感想シェア、意見交換、作文活動を実施した。また輪読指導（音読は前頭葉の活性化を促すとして近年注目されている）と新出単語の確認も併せて行った。2冊目は25年秋にメキシコ革命を舞台背景とした歴史小説（対象年齢14～15歳）を読んだ。約250ページを全4回に分けて読み、前回同様別紙のレジュメに沿って活動した。2冊目活動時は内容を楽しむ余裕が出てきたり（1冊目は読むことで手一杯だった子どもが多かった）、仲間たちとの意見交換に楽しみを見出したりする子どもが増え、総じて前回活動時よりも積極的に取り組む姿勢が見られた。

## No.2

### NPO法人 幸縁

グアテマラと日本の両国にて小中学生を主対象に教育活動を実施。また教育活動を通じて、日本-グアテマラ間における顔が見える人的交流を大切にしている。

〒448-0001 愛知県刈谷市井ヶ谷町中前田43

TEL：070-8992-7661

e-mail：shienpor100@gmail.com

URL：www.shien100.org



### 活動の成果と課題

読書が習慣化するまでのスピードについて、小学生は物珍しさもあったのかほぼ全員が最初から集中して本を読む姿が見られた。読了後の作文活動も担当講師（現地人の大学生を雇用）の丁寧な添削を受けながら継続的に取り組んでいる。このように小学生の読書習慣は、塾の授業を通じて完全に定着していると思われる。

一方の中学生は、この年齢まで活字を読む習慣がなかったため、特に活動初期においては「読了」というハードルが（数十ページ程の短い本だったとしても）こちらの想定以上に高いようだった。そこで読書活動の取り組み方を、「各自読了後に集まって活動する」やり方から「数十ページずつ読み進めていく」やり方に変更し、読了を参加者全員に体験させることから始めた。その結果、秋期間の活動後期には読書に対して前向きな感想を持つ子どもが増えてきた（但し読了冊数は計画の1/3になった）。

中学生に関しては、読書（活字）への抵抗やハードルがようやく払拭されてきたところなので、読書の楽しさ（と学業を続ける上での重要性）の理解促進と読書の習慣化の定着に向けて、本活動は今後も持続的に実施していきたいところである。



小学生の読書タイム



中学生の読書活動風景



仲間たちと意見交換中

### 実施事業での現地もしくは参加者の声

これまで本を読む習慣がなく、最初は文字を読み思考整理することがとても大変に感じたが、慣れてくると映像で観る物語よりもっと豊かに各場面を想像することができ（それらを人に伝えるよう表現することは難しいが）、今まで経験したことの無い充実した時間の過ごし方ができた。（読書活動に参加した中学生より）

### 事業実施団体のひとこと

地球の裏側の子ども達と直に繋がることのできる里親制度・国際交流・英語指導ボランティアといった教育活動を通じて、日本とグアテマラ双方に幸がある縁作りを大切にしています。

## 在日外国人への訪問ケアの導入を円滑にする インテイクシートの開発

実施団体は在日外国人を対象とした訪問ケアにおけるサービスの利用者と提供者の関係を円滑化することを目的に、訪問ケア導入時に使用する文化感受性のあるインテイクシートを開発し、同シートを訪問ケア関係者に紹介するためのセミナーを開催した。



### 事業の背景と目的

日本国内の在留外国人は増加を続けており、医療や福祉領域においても外国人利用者への対応が重要な課題となっている。特に訪問看護をはじめとする訪問ケアの現場では、利用者の生活環境に即した個別的支援が求められる。しかしながら、現状においては利用開始時や支援継続過程において支援者・利用者双方が不安や戸惑いを抱き、支援の円滑な導入に支障を来す場合も少なくない。その原因の一つとして、言語的障壁、文化・宗教観、生活習慣、さらには社会保障制度への理解度の違いなどが相互理解を妨げていることが考えられる。特にケア導入初期の段階で、ケア提供者が利用者の文化的・社会的背景を十分に把握できないことは、支援の目標設定や介入方針の妥当性に影響を及ぼす可能性がある。そこで本事業では、訪問ケア事業所がケア導入時の面談や観察に利用するインテイクシート（利用者に関する情報を記入する書式）に着目し、国際リハビリテーション研究会（<https://int-rehabil.jp/>）と共同で、在宅生活に関する情報を遺漏なく収集できるよう多文化的視点を取り入れたインテイクシートを開発し、それを訪問ケア関係者や外国人支援関係者に紹介することとした。



### 事業の内容

本事業は①～③の順に実施された。

① プロジェクトチームによるインテイクシートたたき台の作成（4月～7月）：事業所の導入にかかる心理的負担を軽減するために、各事業所が普段から利用している既存のインテイクシートに追加できる仕様とした。その上で、追加が必要と思われる項目を抽出した。さらに、在留外国人支援有識者の意見を参考にたたき台を作成した。

② 訪問ケア関係者向けのインテイクシート紹介セミナーの開催（8月～10月）：在留外国人の訪問ケアに関心のある人や実際に従事している人を対象にセミナーを開催し、追加項目案の検討を行うとともに利用にあたっての意見を聴取した（8月3日愛知県、9月13日大阪府、10月5日東京都）。

愛知県と東京都で実施したセミナーは3部構成で、第1部は訪問ケア現場で役立つ「やさしい日本語」に関する講演（名古屋会場：樋口倫代BiPH代表理事、東京会場：武田裕子順天堂大学教授）、第2部はインテイクシートの紹介、第3部は参加者を交えてのディスカッション、とした。（大阪府で開催したセミナーは在宅ケア学会の交流集会として実施したため、時間の関係上、第1部の講演を割愛した。）

参加者は医療福祉関係者（医師、看護師、作業療法士、理学療法士、介護福祉士、社会福祉士、他）や外国人支援に携わる人など計60名であった。参加者からは追加項目についての意見のほか、現場で実際に使う際の懸念点等が出された。特に多かったのは、使用する際の注意点や各項目を聞き取ることの意義などがわかるものと良い、との意見であった。

③ インテイクシート初版の完成とガイドラインの作成（11月～3月）：②のセミナーで出た意見を踏まえて、インテイクシート初版を作成した。また、現場で実際に使用する際のガイドラインを作成し、インテイクシート本体と合わせて普及することとした。



## 一般社団法人 Bridges in Public Health

国内外における地域保健に関する人材育成支援ならびにネットワーキング

〒467-0028 愛知県名古屋瑞穂区田辺通1-22-2

TEL : 052-846-5878 FAX : なし

e-mail : adm.office14@biph.jp

URL : https://biph.jp/



## 活動の成果と課題

## 【成果】

1点目は、有識者の意見ならびに紹介セミナーを経て多文化版インテイクシートの初版が完成したことである。インテイクシートの項目は、基本情報7項目、人的資源2項目、サービス・制度6項目、言語・コミュニケーション7項目、文化・慣習3項目となった。2点目の成果は、ガイドラインの必要性和内容が理解できたことであった。セミナー参加者からは、利用にあたり配慮が必要な点として、利用者・提供者双方の負担軽減、聴取のタイミング、やさしい日本語などわかりやすい言葉で聴取することなどが挙げられ、それらを踏まえた利用ガイドラインの必要性が提言された。これらの意見を踏まえて、今後はガイドライン作成と、訪問ケア事業所でのトライアル実施を進める予定である。



東京会場

## 【課題】

本事業を通してわかったことは、外国人利用者を受け入れる訪問ケア事業所が広がらない原因の一つに、外国人対応に慣れている事業所に受け入れ希望者が集中する傾向にあることである。多文化版インテイクシートを、外国人利用者の受け入れ経験がない（あるいは少ない）ケア提供者が気軽に活用できる仕様にすること、そして、それを受入経験の少ない訪問ケア事業所に周知することが今後の課題である。



名古屋会場



東京会場

## 実施事業での現地もしくは参加者の声

セミナー参加者からの意見として、「このようなインテイクシートが欲しかった」「利用者の文化的背景を細かく知ることや、やさしい日本語を使うことは外国人利用者だけでなく、日本人利用者にも役に立つ」などの意見が多かった。それと同時に、実際に使うには利用者・提供者双方に負担がかかることを懸念する意見も多かった。これらの意見を今後の活動に活かしていきたい。

## 事業実施団体のひとこと

在留外国人への訪問ケアでは、利用者の心身の状態や生活課題のみならず、経済状況や価値観を含む文化的・社会的背景を踏まえた包括的理解が不可欠である。本事業で作成したインテイクシートは、支援の見通しを立てやすくするだけでなく、ケア利用者と提供者の信頼関係づくりにも役立つと思われる。また、他機関との情報共有のためのツールとして活用することで、支援者間の連携促進や支援の質の向上にも寄与すると考えられる。今後は実際の訪問ケア場面で試行し、より実践的かつ汎用性の高いツールへ発展させていきたい。

## It's Me Camp 2025

多文化時代を生きる10代の若者が、国籍や言葉の違いを超えて出会い、楽しみながらエンパワーし合える場を作ろうと2017年に開始した。若者たちが多様な人とのコミュニケーションを通して視野や価値観を広げ、自分らしさを発見し、将来への展望をもってくれることを目指している。また、2024年からは開催地の住民の協力を得て、日本の伝統的な食文化を味わうことや、自然の中での川遊びを体験する活動も取り入れている。



### 事業の背景と目的

愛知県には“日本語指導が必要”とされる児童生徒が1万人以上おり、多文化共生において全国でも突出した課題先進県となっている。重要なのは日本語教育や学習支援に加え、外国にルーツをもつ青少年の総合的・包括的育成であるが、特に中学～高校生世代に対する取り組みは少ない。学習のモチベーションを上げるためにも、多様な仲間と出会うことによって世界観を広げ、将来の自分像をイメージできる機会が必要だと考える。

このキャンプでは、多様な文化背景をもつ13～19歳の若者が、交流や体験活動を通してお互いの違いを理解し、相互に尊重すると共に、多様性の中で新しい自分を見つけ、自己肯定感を高めることを目的としている。全ての参加者が対等な立場で、かつ自分がマイノリティではない環境で多文化交流や自然体験を楽しむことにより、自己解放が促され、日本での生活や学習へのモチベーションが上がる効果が期待できる。また日本の伝統的な食べ物や遊びを通して日本理解が促され、さらに、本キャンプのOBOGである若手ボランティアスタッフとも交流することによって、将来の目標を見つけ、なりたい自分像を思い描けるようになる効果も期待できる。



### 事業の内容

#### 【1日目：アートでつながる、火を囲んで心が開く】

はじめにアイスブレイクゲームを行い、初対面同士でも安心して関われる雰囲気づくりを行った。続くアートワークショップでは、今回は「自然の四元素（土・火・水・空気）」をテーマにグループに分かれ、音楽・ダンス・絵など多様な方法で作品をつくり、言葉を超えて「自分」を表現した。発表時には緊張しながらも、舞台に立つと笑顔が広がり、終了後にはグループを超えて交流を深める様子が見られた。

夕食には、日本、フィリピン、インドネシアの3ヶ国の焼きそばを味わい、ボランティアスタッフも地元の子どもたちと一緒に楽しんだ。夕食後はグラウンドに集まり、参加者が1人ずつキャンドルを手にはキャンブファイヤーを囲み、点火。その後はDJの音楽に合わせて自由に踊り、ゲストシンガーによる歌の披露とともに一体感を味わった。

#### 【2日目：地域とつながり、自分の物語を語り合う】

地域住民の協力のもと大自然の中で川遊びを実施した。川遊びを安全に楽しむためのレクチャーを受けた後、生き物探しや魚取り、水の掛け合いなどを楽しんだ。その後、根羽村に移住してきた日本生まれ日本育ち、アメリカ人のリリーさんの自宅でバーベキューを行った。自然に囲まれ、動物ともふれあいながら、のどかな雰囲気の中でのびのびと過ごしたり、サッカーやバドミントンなど身体を動かす遊びをしたりと交流を深めた。

昼食後は、リリーさんに「自分を受け入れることの難しさ」を、思春期の経験を交えて話してもらった。その後は小グループで対話を行い、普段は話せない思いや悩みを共有した。涙を流しながら語る参加者もあり、自己理解と相互理解が深まる機会となった。



各元素のグループに分かれて、発表準備

## No.4

### 一般社団法人 DiVE.tv

- ・多文化共生に資する情報発信および動画等コンテンツの制作
- ・多文化共生に資するイベントの企画運営
- ・外国にルーツをもつ若者のキャリア相談 ・日本語教室の運営
- ・在日ブラジル学校における日本語教育支援 ・レンタルスペースの運営 など

〒472-0032 知立市中山町中山42-3 TEL：080-3745-7991  
e-mail：info@div-tv.nagoya URL：https://www.dive-tv.nagoya/



### 活動の成果と課題

年齢や国籍、バックグラウンドが違う人たちが、今年は12ヶ国65名が集まり、アートワークショップやキャンプファイヤーなど自己表現を行える様々な活動に取り組んだ。10代の若者が自分自身と向き合い、仲間と共に過ごすことで、日本で前向きに生きるための意欲を高めることができた。また今年はボランティアスタッフの国籍や在留資格も多様だったことから、今後の日本社会の国際化を肌で感じ、参加者の視野が広がるきっかけにもなった。

一方、根羽村での開催は昨年に続き2回目となり、地元の人との協力を得られやすくなったことも大きな成果だった。特に自然の大切さや脅威について川遊びの前に地元の方に語っていただいたり、村に移住したアメリカ人女性にその経験や思いを語っていただいたりしたことは、参加者たちにとっても非常に意義深かった。

世代や国籍を越えた交流が生まれた一方で、キャンプ終了後は新たに築いた関係が途切れやすくなり、意識や行動が元に戻る可能性があることが課題として挙げられる。今後は、定期的なイベントや講座の実施を通じて継続的なつながりを生みだせる環境を作っていきたい。



ワークショップの成果発表



地元の川遊び名人から遊び方を学ぶ



根羽村在住のリリーさんのストーリーを聞く

#### 実施事業での現地もしくは参加者の声

- ・最初は恥ずかしかったけど、グループでアートの発表をした後は自分を自由に表現できるようになったと思います。(16歳ブラジル人)
- ・誰でも新しいことに挑戦するのは怖いと思いますが、このキャンプの一番の魅力は自分に挑戦できることです。(19歳フィリピン人)
- ・みんなが、まるで一つのチームみたいでした。それぞれが自分に向き合って、自信をつけて、笑顔になっていく姿を見れたことが本当にうれしいです。(40代日本人)

#### 事業実施団体のひとこと

日頃から外国人市民と対話を重ねる中で、「日本人の友達ができない」「日本語を勉強しなければいけないけど、なかなかモチベーションが上がらない」「さみしい」などの声を世代を問わず多く聞きます。文化体験や交流を楽しめる場が少なく、日本人とのコミュニケーションに慣れるまでに時間がかかってしまうのが要因の一つではないかと感じています。本事業は青少年育成の目的で始めたものですが、今回大人のボランティアをより多国籍にしたことによって、事業の質が変わり、より重層的で包括的な活動にアップグレードすることができました。

## 食品配布支援

フィリピン・マニラの空港から車で約1時間半のカブヤオ市にある、貧困家庭の多い地区のサウスビル小学校（児童数5,700人）で、食品配布支援を行っています。食事が取れず、空腹や病気で欠席がちになったり、進級できずに同学年を再履修したり、学年途中で通学を中止したりする児童を対象としています。幼稚園から6年生までの全7学年で、各学年の先生が20人ずつ選考し、合計140人を支援対象として選定しています。対象児童は半期ごとに見直しを行い、年間では延べ280人の児童とその家族に対し、毎月2回、学校で食品を配布しています。財源は、RASA-Japanの支援者からの寄付金と会費です。



### 事業の背景と目的

30年以上前にMANILAでOPEC開催の際、政府は、線路沿い不法占拠住民をサウスビルに強制移住させた。当時この地は農業主体、働く場所がなく定職、日銭稼ぎの仕事もなく、無収入家庭の児童は、食事欠乏、通学困難で、小学校ですら卒業できない児童が多かった。都会で日銭稼ぎの仕事の親も定職に付ける力なし。2011年RASAがSOUTHVILLE1小学校の増築中、PTAから学外で飢餓児童50人に給食依頼を受けとめたのが始まり。親に社会で就職できる能力がなく、その日その日の日銭稼ぎの不安定な生活、貧困の連鎖を児童が繰り返さないように、社会で生きていける基礎能力をつけるために、せめて小学校を卒業してほしい。給食だと本人だけだが、家族で食事ができるように食品配布を継続している。

2015年から校内に給食設備を新設し、卒業できるようにと、休みがちな支援の必要な5.6年生100名に、登校日に給食を支給。対象児は全員卒業出来ました。しかし、コロナ禍で1年半学校閉鎖、給食不可。その間飢餓の死者が出ました。翌2021年9月から、学校の希望で児童だけでなく其の家族も支援できるように、全7学年を対象に学校内で、食品配布支援をすることになった。大幅な資金獲得のため、寄付金獲得にと、関東方面にもアピール活動展開し、実現に向け資金獲得ができたのです。



### 事業の内容

RASA-Japanと現地SOUTHVILLE1小学校と、契約を結び、RASAの年間予算480万円で、2025年度4月から翌年3月迄417万円+調査出張費も含めました。原則月2回配布ですが、4月と12月は1回配布、他は月2回配布を実施。1回の配布食品内容は予算内で購入一米5Kg（700kg/回）は必ず確保、卵6～10個、粉ミルク4～7袋、缶詰2～4個、乾麺ヌードル1～3個などは購入時の物価に応じて予算内で個数を決めて購入。



大型店で缶詰、粉ミルクヌードルを購入

RASAの現地責任者Dennis氏に、日本から送金し、出張時に持参し一旦通帳に記録。彼は、食品の購入費領収書や人件費（コーディネーター2、ヘルパー2、彼自身のサラリー）ガソリン代、の支払記録やサインもメールで送付されてきている。食品購入時は、価格調査して割安で少しでも多くの食品を配布できる工夫をしている。食品の調達や運搬、140人へ配布袋詰め（卵以外）を、彼の自宅で、近所の数人のvolunteerの協力で、行われている。

食品の入った140袋は配布朝に学校へ運び、卵は直接業者が運び袋詰め。コーディネーター2名や先生方が配布にかかわる。対象の大勢の親やその家族も一緒に詰め掛ける。受け取り時にサインするが、その時に児童や家族の状況などを聞く。当日来られない場合は、学校で保管し後日手渡す。

Dennisからは会計報告、送金の通帳記録、買い物の領収証、人件費は、ヘルパー2、コーディネーター2、Dennisの給料です。購入食品のレシート、配布状況の児童や家族の写真が配布日毎にRASAに送られてくる。また配布食品受取サインの7学年分の記録も送られてくる。多くの児童が平等に選ばれるように、半期毎に、140人を選択して、年間280人が対象。そのうち困窮者約50人が、通年支援を受けています。

## 特定非営利活動法人 RASA-Japan

フィリピンの学校教育施設並びに、生活支援、栄養障害児救済事業  
ボランティア派遣事業

〒468-0014名古屋市天白区中平二丁目2627番地

TEL : 052-803-1649 FAX : 052-803-1649

e-mail : [info@rasa-japan.com](mailto:info@rasa-japan.com)

URL : <http://rasa-japan.com>



## 活動の成果と課題

2部授業ですが、受益児童が家で食事をして登校してこられるようになり出席率の向上実績が出ています。学力もついたと聞いています。コーディネーターが、半期の初めと終わりに身長、体重を測定して、BMIを算出。数値が上がり、体位向上している。

被支援児童は各学年の先生約20名とコーディネーターが、児童の健康状態、家族数、父母それぞれの仕事と月収、子供の数、両親が働けるかどうかなどから決定。家族の諸状態が変化するので、必ずしも、児童の選択が合理的と言えない。コメ価格が上昇で、毎回5Kgは価格が上がっても、配布しているので他の蛋白やミネラル食品が少なくなっている。



ボランティアさんが米や缶詰などを分ける（140袋）



配布食品を受け取るため家族がサインをする



対象児童選定時（6か月毎）に児童の身体測定を行う

### 実施事業での現地もしくは参加者の声

配布時に立ち会うと、家族や児童からの感謝の言葉と、児童や親からの手紙をたくさんもらいました。News Letter 50号に載せたように、「感謝」「他の友人も選ばれますように」、「次の時も選んでほしい」

### 事業実施団体のひとこと

貧困層の多いフィリピンの地域の児童に2002年から活動。多くの支援者に支えられ、学校建設32校、日本volunteer786名、奨学金、給食から食品配布支援を現在行っています。

# 東海地域NGO活動助成金 (名古屋NGOセンター・真如苑共催) 公募要項

この助成金は、東海地域を拠点に活動するNGO団体の活動を支援し、その発展に寄与することを目的に、特定非営利活動法人名古屋NGOセンターと宗教法人真如苑の協働事業として2009年1月に設立されたものです。助成資金は真如苑からの寄付によるもので、名古屋NGOセンターはこの寄付が有効に生かされるよう、本要項にそって助成団体を公募します。

## 1. 対象団体

愛知、岐阜、三重、静岡県内に活動拠点があるNGO団体で、申請時において設立後3年以上経過し、継続的な活動実績がある団体。法人格の有無は問いませんが、民主的で開かれた組織運営がなされていること。応募は1団体につき1件のみとします。なお、前年度までに採択された団体または事業も応募することができますが、直近の3年間で複数回本助成金を受けている場合には、優先順位が低くなります。

## 2. 助成対象期間

(1) 2025年4月1日から2026年3月31日の間に実施する事業を対象とします。

(2) すでに実施中で2025年度も継続する事業や、2026年度以降も継続する事業も応募できます。この場合、上記(1)の期間中に実施される部分が助成の対象となります。

\*事業の実施場所は国内、国外を問いません。2026年5月末までに事業実施報告書を提出できることが条件です。

## 3. 採択予定件数と助成金額

6件程度。1件あたり20万円以内、かつ対象事業経費の80%以内。助成総額105万円を上限に配分します。

## 4. 助成対象事業

名古屋NGOセンターのミッションと行動規範を定めた「ステファニ憲章\*」の精神に合致していれば、特に分野は定めません。教育、保健、医療、福祉などの分野、職業訓練、技術移転、人づくりを通じた自立支援、災害復興、環境保全、多文化共生、その他の人道的活動や啓発活動など、国の内外を問わず様々な活動が対象となります。組織基盤の強化、専門スタッフの育成、広報ツールや一般向け教材の開発、活動の輪を広げることに結びつくようなチャリティ・イベントやファンド・レイジング事業も対象とします。

5. 提出書類((1)はメールで送信して下さい。(2)~(4)は郵送または直接持参して下さい。)

(1) 助成申請書、事業計画書、収支予算書 各1部  
(様式は名古屋NGOセンターのホームページ <http://www.nangoc.org>からダウンロードできます)

(2) 団体の定款(会則)、役員名簿 各5部 ※助成金交付申請書にwebサイトを記載した団体は省略可

(3) 前年度の事業報告書および決算報告書(またはそれらに準じた資料) 各5部

(4) 会報またはパンフレットなど活動内容がわかる資料3点×5部(重要な箇所それぞれ数ページ程度をA4サイズでコピーしても結構です。この場合も資料3点(コピー)×5部を提出してください) ※(4)の資料がない場合は、A4用紙1枚程度で「団体の概要」をお書きください。

## 6. 応募受付期間

2024年12月17日(火)~2025年1月17日(金) 必着

## 7. 応募書類提出先、問い合わせ先

〒460-0004 愛知県名古屋市中区新栄町2丁目3番地 YWCAビル7階

特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター事務局

TEL&FAX:052-228-8109 e-mail:info@nangoc.org

※応募書類受領後、当該団体または担当者様に受領確認のメールを送ります。応募締切日より5日を過ぎても受領確認のメールが届かない場合は、上記事務局までお問合せ下さい。

## 8. 選考方法および結果通知

(1) 選考は、外部有識者等で構成される選考委員会により厳正に行われます。

(2) 第一次選考：申請書類に基づいて行い、2025年2月14日(金)までに結果を通知いたします。

(3) 最終選考：一次選考通過団体を対象に、2025年3月1日(土)午後、会場未定(1団体5分間程度のプレゼンの後、選考委員による7、8分程度の質疑)。プレゼン(質疑対応含む)は基本的に1団体2名以内でお願いします。

(4) 最終結果は2025年3月19日(水)までに通知します。

(5) 必要な場合、追加資料のご提出などをお願いする場合があります。

(6) 選考過程の詳細や採否理由に関するお問い合わせにはお答えできません。

## 9. その他

(1) 最終選考(公開プレゼン)に進んだ団体には、2名以内かつ合計1万2千円以内で交通費を補助します。ただし、団体事務所の住所を基準に、公共交通機関で往復2,000円以上要する場合に限ります。

(2) 助成金の交付は2025年3月下旬までに行います。

(3) 虚偽の記載や資金の不適切な使用などが判明した場合は、助成金の全額または一部を返還していただく場合があります。

(4) 本助成を受けて実施する事業について、報告や広報媒体への掲載を行う際には「東海地域NGO活動助成金(名古屋NGOセンター・真如苑共催)」を受けた旨を明記してください。報道で取り上げられた場合は記事コピーやビデオ等を名古屋NGOセンターに提出してください。

(5) 事業修了後に助成金額分の領収書のコピーを提出して頂きます(助成期間内の領収書に限る)。



2025年度  
東海地域NGO活動助成金 報告書

発行者：  
宗教法人 真如苑  
URL： <http://www.shinnyo-en.or.jp>

特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター  
〒460-0004  
名古屋市中区新栄町2-3 YWCAビル7F  
TEL&FAX：052-228-8109  
E-Mail： [info@nangoc.org](mailto:info@nangoc.org)  
URL： <http://www.nangoc.org>



# (特活) 名古屋NGOセンターの紹介

名古屋NGOセンターは、貧困・紛争・環境破壊などの地球規模の課題を解決するために、市民が主体となり取り組む活動を支援しています。支援を通して、人権、平和、環境が守られる社会の創造をめざしています。



## 35 の加盟団体が世界中で活躍しています

- ・認定NPO法人 アイキャン
- ・公益財団法人 アジア保健研修所（AHI）
- ・公益社団法人 アムネスティ・インターナショナル日本 “なごや栄・わや” グループ
- ・（特活）アーユス仏教国際協力ネットワーク
- ・（特活）イカオ・アコ
- ・公益財団法人 オイスカ中部日本研修センター
- ・オリーブジャパン国際開発協力協会
- ・（特活）キャンヘルプタイランド
- ・（特活）タランガ・フレンドシップ・グループ
- ・（特活）地域国際活動研究センターCDIC
- ・（特活）チェルノブイリ救援・中部
- ・なごや自由学校
- ・公益財団法人 名古屋YWCA
- ・南遊の会
- ・（特活）NIED・国際理解教育センター
- ・HungerZero  
（一般財団法人 日本国際飢餓対策機構）
- ・日本バングラデシュ友好協会（JBSCS）
- ・ハート・フォー・ザ・ワールド・ジャパン
- ・フィリピン人移住者センター（FMC）
- ・不戦へのネットワーク
- ・認定NPO法人 平和のための戦争メモリアルセンター
- ・ベシャワール会名古屋
- ・認定NPO法人 ホープ・インターナショナル開発機構
- ・認定NPO法人 インド福祉村協会
- ・（特活）ボラみみより情報局
- ・（特活）泉京・垂井
- ・（特活）DIFAR
- ・（特活）多文化共生リソースセンター東海
- ・ビニンブラザーホッド トーカイジャパン
- ・（特活）まちづくりスポット
- ・（特活）ル・スリール・ジャポン
- ・認定NPO法人 アジア車いす交流センター（WAFCA）
- ・認定NPO法人 ムラのミライ
- ・NPO法人 外国人ヘルプライン東海
- ・認定NPO法人 中部リサイクル運動市民の会

※（特活）は、特定非営利活動法人の略です。 順不同